

松江ゴーストツアー新規語り部養成講座の取組 —語り研修の中で—

Efforts to Train the New Storytellers for the Matsue Ghost Tour
—Narrative Training—

岩田裕子
(非常勤講師)

キーワード：語り、怪談、小泉八雲、観光、ガイド

1. はじめに

「松江ゴーストツアー」が始まったのは2008年8月のことである。当時、島根県立大学に勤務していた小泉凡氏（現小泉八雲記念館館長）が発起人となり、松江市内の4つの観光文化施設の管理を行っていたNPO法人松江ツーリズム研究会（以下、松江ツーリズム研究会と記す）に話をもちかけ、開催した。日没時刻前にツアーが始まり、月照寺や大雄寺（だいおうじ）など小泉八雲（1850-1904）が再話した怪談ゆかりの場所の魅力を語り部（ガイド）（以下、語り部と記す）の案内のもと、徒歩で巡りながら、「耳なし芳一」や「子育て幽霊話」などの怪談を楽しむ。小泉凡氏の講演や宍道湖七珍の懐石料理がセットになることもあった。2017年末までの開催回数は316回を数え、県内客はもちろん、多くの観光客を集め、その数は5000人を超えた。

しかしながら、松江ツーリズム研究会の規模縮小などの事情により、2018年度から、主催は一般社団法人松江観光協会（以下、松江観光協会と記す）に引き継がれた。モニターツアーを実施してコースの変更を行うなど策を講じ、人気のまち歩きツアーとして地元にも根付いてきた。しかし、松江観光協会としては、引き継がれる前には3名いた語り部が1名に減り、客の要望日程に答えられない状況が気になりであった。語り部はツアーの要である。語り部養成なくして魅力あるツアーの存続はないと筆者の元に2019年10月、語り部養成講座の怪談の語り研修の講師要請があった。

市報で公募をかけ、2020年6月から10月まで研修、その後語り部選考オーディションの予定も全国的な新型コロナウイルス感染拡大が実施に待ったをかけた。先が見通せない中、松江観光協会と検討を重ね、実情に即した形で行われることになった。語り部は、一般枠、学生枠を設けることになり、一般枠は松江観光協会から、これまでに「松江ゴーストツアー」によく参加していたり、ガイドや接客経験のある人に声かけをし、3名が受講すること

になった。学生枠は、島根県立大学松江キャンパスの筆者の授業の「読み聞かせの実践」を履修していた地域文化学科の2年生に呼びかけ、4名が受講することになった。幸い、この学生達は、1年時に、小泉凡氏の授業の「地域文学論Ⅰ（小泉八雲）」を履修しており、「松江ゴーストツアー」の素地がすでにできていることが大きい。講座は、12月から2月にかけて計5回の研修、その後3月下旬の選考オーディションを通過すれば2021年度の夏デビューということになった。学生達に関しては、松江観光協会の計らいで、事前に実際の「松江ゴーストツアー」体験会が実施された。その前の学生ガイド説明会時に、担当者からの、学生が主体となって考えていけるような学生バージョンも取り入れたいという話に、学生達も意欲を示した。

本稿では、「松江ゴーストツアー」新規語り部養成講座の語り研修の取組について報告し、今後の活動に活かしたい。

2. 新規語り部養成講座—語り研修の特色

語り研修は計3回、決して多くはない。しかも新型コロナウイルス感染予防対策のため、担当者から1回の研修時間はなるべく1時間におさめてほしいとのことであった。研修が実施できることに喜びを感じつつも、どう組み立てていくか、頭を抱えた。前述した通り、新規語り部養成講座の実施時期の変更もあり、学生は2回目の語り研修が試験期間と重なり、参加が難しくなった。その1回分もどのように補うか考えた末、語り研修の時間内で完結させることよりも、研修を受けた受講生自身が、時間外の時間を活用して楽しみながら取り組むことができるように組み立てていくことにした。

「松江ゴーストツアー」には、語り部用の台本がある。これは、松江観光協会が、前身の松江ツーリズム研究会時代に作成された資料と現行の「松江ゴーストツアー」での語り部の語り、資料を活字におこしたもので、スタッフからのお知らせと注意事項、語り部が語る怪談とガイド説明からなる。

この度の新規語り部養成講座の実施に伴い、より語りやすく、聞きやすく、味わい深いものになるようにと筆者が怪談の語り部分に手を入れた。受講生には、語り研修の中で、実際の「松江ゴーストツアー」の中で語っていく怪談6話①「耳なし芳一」（筋違橋）（すじかいばし）②「雪女との遭遇」（月照寺橋）③「化け狐」（月照寺橋）④「人食いの大亀」（月照寺）⑤「消えぬ芸者の足跡」（清光院）⑥「子育て幽霊話」（大雄寺）の中から1話を選び、覚えて1回語ってもらうことにした。

1) 「語るための一と」の作成

怪談を覚えて語るための手助けとして、「語るための一と」なるものを作成した。これは、大学の「読み聞かせの実践」の授業で使用している、作品解

積ノートに着想を得たものであり、選んだ怪談とそれについてのテーマ（キーワード）、魅力を感じるどころ、覚えるための場面分け（時間・場所・人物・出来事などを考えて）、語ってみて（メモ）、備考（他の人の語りの参考になるところなどをメモ）の項目を設けたシートである。語るためには覚え方から大事にしてほしいと思ったのである。この「語るための一と」は、記入する前にやるべき作業がある。覚える怪談を1回目は、全体像をつかむためにイメージをしながら黙読をする。2回目は、1回目と同じようにイメージをしながら自分の語り（まだ語りにはなっていないが）を自分で聞くようにして声に出して読んでいく。その後、怪談に目を通して、「語るための一と」に記入していく。まずは、じっくりと怪談と向き合い、楽しみながら、自分の絵を動かしていくのである。覚えるための場面分けは、筆者が語った「雪女」を例に挙げる。怪談全体を字面ではなく、絵にして捉えていき、自分のイメージの場面ごとの絵を文でまとめていくという感じである。これを頼りにしながら、覚えていく段階でどうしても覚えにくい言葉や抜けやすい言葉が出てきた場合、意識するためにその言葉を付け足していくのも方法の一つだと示した。これは、あくまでも方法の一つである。

2) 八雲の怪談奇談だ Yo! ~発声練習として（ラップ風に）

受講生は、小泉八雲の怪談について、大なり小なり触れてきた人達ばかりである。この語り研修では、台本に載っている怪談だけを読むのではなく、八雲の怪談の世界をたっぷりと感じて広げ、語りを一緒に深めてい

八雲の怪談奇談だ Yo!

1. 『小豆磨ぎ橋』で～は、「杜若」はうたうな Yo!
2. 母の愛は死よりも強し、『餡を買う女』!
3. 『子捨ての話』、百姓、反省、僧になる、Hey!
4. 「兄さん、寒かろう」「お前、寒かろう」『鳥取の布団』
5. 麻を全部くれるなら、『幽霊滝』まで、お勝さん
6. 赤穴の信義、丈部の忠誠、『菊花の契り』とは!!
7. 不思議なじいさん、『泉心居士』、仏画に魂吹き込む Yo!
8. 『ろくろ首』、回龍の袂に食らいつく
9. ずんずんずん、ずんずんずん、抱えた赤子の目方増し、『忠兵衛』、力の限り!
10. 友忠と『青柳』、来世もきっと出会ってくれ!

きたいと思い、発声練習に八雲が再話した怪談を盛り込んでみようと考えた。選んだ怪談は、全部で10話、山陰ゆかりのものから筆者の好みまでさま

ざまである。自分の知っている怪談を見つけると嬉しいだろうし、知らない怪談は読んでみて、発声練習の文言に「そういうことか。」とうなずけるように、その怪談のエッセンスを抽出してみたつもりである。なお、発声練習という性質上、喉に負担をかけないように、お腹に力を入れて発声してもらえようように、ラップ風に構成してみた。怪談とはかなり趣が違うが、その mismatch も楽しんでほしい。「！」エクスクラメーションマークの箇所では、片手の人差し指と親指を立てて手を大きく前方に投げかけ、声と気持ちに勢いをつけてみる。最終的には、全身でリズムを刻みながら発声し、語る前に、心と身体をほぐすのがねらいである。

3) 7つのポイント～語りを楽しむために～

今回の語り研修では、こちらから語りの枠を作りすぎて、語り手をそれにあてはめることのないようにしたい。受講生の、語り手としての考えや思いを大切に語りてほしいと思い、語りの実践の前に、語る怪談と聞き手に向き合う意識については触れるが、語り方については、受講生の語りの実践が終了した最終回に、受講生自身の語りを振り返ってもらいながら、7つのポイントを絞って語りのまとめをし、今後の語りにつなげるようにした。内容は、現在もお話のグループに所属し、学びながら語っている筆者の経験から挙げた。筆者自身が語っていく上でも、こんな風に語りていければと希望的なものでもある。以下に、説明内容を簡単にまとめる。

(1) 覚えて語るることについて

自分の中に怪談をイメージしながらきちんと覚えて語ることで、怪談に命を吹きこみ、聞き手と一体となって怪談の世界を見て楽しむことができる。

(2) 速さについて

入りはゆっくり、おしまいもゆっくり。登場人物・場所・時・出来事の始まりの予感などから最後の空白行までたっぷり丁寧に聞き手に見せる気持ちで楽しむ。また、聞き手の心の呼吸を感じながら、お話を展開していく。イメージしながら語っていく中で、自分の語る怪談の速さが安定してくる。

(3) 間（ま）について

間も怪談の一部であり、怪談の流れに乗って、かつ、聞き手との心のやり取りの中で怪談全体が作られていく。聞き手を怪談の先へといざなう間・場面転換の間・時間経過の間・余韻の間・緊迫感の間など、さまざまな間を感じて語ることで、怪談がより生き生きとしてくる。

(4) 声について

聞き手に負担をかけないように、一番後ろの聞き手にまで声と怪談がしっかり届くように意識する。声色・言い回しなど、どんなふうに語るかを考えるよりもイメージして語っていくことで情景も見え、人物が立ってくる。ア

クセント・イントネーションについては、明らかに意味が変わってしまうものの以外はあまり気にしすぎない方がよい。

自分の語りを声で客観的に捉えるために、録音機器を使って録音し、再生して聞いてみるのも一つの方法であるが、怪談を覚えるために使用するのをおすすめしない。イメージした語りがきちんと整ってきてからのものでないと、浅い語りを聞くことになるし、聞き方も字面に頼った聞き方になりがちで、聞き手としてもイメージを描きにくいからである。逆に、整った語りを録音して聞いてみることは、自分がどう感じて語っているかを捉えることができ、聞く力も育つ。その上で、語尾が消えやすい、語りがうねりやすいなど、気になる癖なども発見できる。

(5) 表情、しぐさ、視線について

表情やしぐさは考えすぎずに、怪談の流れに乗って自然に出てくるものである。その行為が、語り手と聞き手の双方に怪談の情景を見せてくれるものかどうかを考えてみる。語りは、言葉で怪談を語る。怪談に外側から色をつけずに内側から出す意識の方がより語りに集中しやすい。

視線については、コロナ禍、マスク着用での語りでは、「目も口ほどにものをいう」というように、より大事になってくるが、聞き手と怪談を見ながら語ることが大事である。お互いに聞き合うことで、怪談を聞く上で気になる癖も発見できる。

(6) 準備、練習について

入念に行うことで、気持ちの入り方や持ち方がぶれず、1回1回の実践を大事にできる。準備不足は、語り手と怪談と聞き手、三者のバランスが崩れる可能性がある。語りと心の安定のためには練習ありき。なるべく本番に近い形で(例：立って)練習し、語りが整ってから人に語る機会を作る。怪談を自分の中にだけとどめずに出して動かしてやる。人の語りを聞くことも自分の語りを深めることになる。

(7) 記録することについて

語る怪談が、どんなお話なのか、まず作品とじっくり向き合う。覚えるために、語るために、「語るための一と」を活用していくのもよい。語りの実践1回1回を振り返ることが語りを育てることにつながるため、日時、場所、語った怪談、参加人数とその年齢層、参加者の反応と語り手自身の語りについての気づき、感想、今後に向けてなどを簡単でもよいので、タイムリーに記録して残しておく。怪談と向き合い、実践と向き合い、今後に活かす。

内容の不十分さはもちろんあるが、語り手自身が語っていく中で、自分の語りを考え、築いていってほしい。

3. 講座の様子

1) 語り研修Ⅰ (1/21) (一般3名、学生4名、担当者3名)

研修の内容

- ①八雲も知っていた！わらべうた「だいせんのやまから」で遊ぼう
- ②八雲再話の「雪女」を聞いてみよう（後で、「雪女」本の紹介10冊）
- ③怪談の語り
 - ・発声練習「八雲の怪談奇談だY0！」
 - ・「松江ゴーストツアー」の中で語る怪談の確認
 - ・怪談を覚えて語るについて

④「語るための一と」の記入

受講生が楽しく覚えて語りたくなるような研修にしたいと思い、スタートした。語るためには、まずは耳から聞く怪談を体験してもらおうと筆者の語りで「雪女」を聞いてもらった。今回は新型コロナウイルス感染予防のため、聞き手との間に十分な距離を取り、マスク着用の中での語りであるが、受講生は、思い思いに楽しめたようだ。発声練習は、大きな声を出すことよりもリラックスして通る声を意識するようにした。怪談を覚えて語るについては、覚え方を大事にしてほしい。字面に頼って丸暗記することは、間違えずにただ出すことに意識が向きがちになる。かといって大筋で何となく覚えることは、語る時に言葉がうろろうろし、毎回ニュアンスの違う怪談になり、イメージできにくくなる。イメージしながらきちんと覚えて語る事が怪談に深みや広がりを持たせ、語り手の持ち味を活かした語りになることを話した。小澤俊夫氏は、「昔ばなしとは何か」の中で、『昔ばなしを語るということは、一種の文芸的なもてなしである。』と述べている。「松江ゴーストツアー」も、「よう来てごしなはった」「聞いてごしない」「だんだん」「またくーだわね」のおもてなし精神に尽きるのではないか。「語るための一と」については、怪談を1話選び、全体像をつかんでイメージを膨らませながら読んでいった後、記入するようにしたが、受講生は抵抗感なくスムーズに書けていた。イメージにじっくり時間をかけてから一気に書き進めている受講生もいた。いくら語り手の思いを大切にしてほしいとはいえ、次回からいきなり語りの実践とは思いますが、とにかく人前で語ってみることに意味がある。質問はいくらでも受け付けることを話し、次回以降、やむを得ず休む場合は、「語るための一と」を整え、声に出して語りの練習を重ねておくように伝えた。

2) 語り研修Ⅱ (2/9) (一般3名、担当者3名)

研修の内容

- ①わらべうた「一二三」とウォーミングアップ

②発声練習「八雲の怪談奇談だ Y0！」

③語り（「耳なし芳一」「子育て幽霊話」「子育て幽霊話」）とコメント

④「語るための一と」メモ記入

⑤今日のポイントまとめ

⑥イギリスの昔話「金の腕」を聞いてみよう

試験期間中のため、学生は不参加。いよいよ語りの実践へ。受講生には、この研修で一話でも多く語りを聞いてもらいたい。聞くことは語りを育てることにつながるからである。そのため、筆者もイギリスの怖い昔話「金の腕」を語ることにした。今日の実践は、事前に名乗り出てくれた2名のみの予定であったが、研修に積極的に取り組む担当者の一人に投げかけたところ、快諾してくれた。実践の流れとして、一話終わるごとに、語り手、聞き手からの振り返りコメントを求め、その後、筆者からコメントをする。決まり事として、聞き手は楽しんで「聞く」ことに集中し、聞いている時にメモは取らないこと。気持ちがメモを取ることに移り、心が怪談から離れて途切れるからである。後でメモの時間を設けた。語り手は、前に立った瞬間、緊張したそうだが、イメージを浮かべながら丁寧に語っていると感じた。受講生からは、「いろんな登場人物の気持ちを感じられて語るのが楽しい」「怖い話というより、赤ちゃんを育てたい一心の女の強い気持ちを感じられた」「これは本当にあった話ですといった風だった」など、語り方よりも感じ方に寄ったコメントが多く聞かれ、怪談世界を深め合えた。こちらからは、怪談の中の登場人物の距離感と間を感じるということについて指摘をした。

今日のポイントまとめで、語りで意識したい点を3つ挙げた。まず、入りを丁寧に語ること。入りは、聞き手にとってはこれからどんなことが待ち受けているのかを知る大事な箇所である。しかし、語り手にとっては、一番多く練習をする箇所ですらすら出てきやすいため、何となく語り進めてしまいがちになるからである。次に、怪談の中のさまざまな間（ま）を感じてみる。計算せず、怪談の流れに乗って聞き手と作っていく。最後に、語り研修では、怪談の語りのみ行うが、語り部は実際にはガイドも担うことになるため、台本の中の二つの違いを意識してみる。終了後、受講生から、自分と人との怪談の覚え方の違いや筆者の日頃の語りについての質問など活発に話が出て、この熱量を学生にも感じてほしいと感じた。

3) 語り研修Ⅲ (2/25) (一般3名、学生4名、担当者4名)

研修の内容

①わらべうた「つくしはつんつん」とウォーミングアップ

②発声練習「八雲の怪談奇談だ Y0！」

③語り（「化け狐」「人食いの大亀」「化け狐」「消えぬ芸者の足跡」「子育て幽

霊話)とコメント

④「語るための一と」メモ記入

⑤7つのポイント(まとめ)～語りを楽しむために

全員揃っての最終回。語りの実践では、怪談から感じた思いをそのまま語りにして出す練習の跡を感じられた語りもあり、真っ直ぐ心に響いた。また、なかなか言葉が運ばず、緊張も手伝ってかなり苦戦した語りもあった。筆者は、途中で、読んでもらうことに切り替えようかと悩んだが、受講生は、語り部になろうとしている人達である。語り始めたからには自分の語りに責任を持って語りきってほしいと思い、待ってみたが、一つ一つを絞り出すようにして語っていた。聞き手からは、「体験談風だと感じられた」「次の言葉が出てこない間が、逆に何が出てくるんだろうと期待感につながったところもあった」「伝えようとするのが分かった」という声が聞かれた。語りは、聞き手と進んでいく。練習時から、一文一文、目の前の怪談を体験していくようにして声に出していくと「頭が真っ白に」なっても、イメージが戻ってきやすいと話した。語り手から「人の分け方が難しかった」、聞き手から「セリフに色をつけすぎていると感じた」というコメントがいくつか出ていたので、「語ること」と「演じる」ことの違いについて考えてもらった。語り手が、登場人物の性格や気持ちを描いて語っていて、聞き手も怪談の世界をイメージできているのに、部分的に、語り口に気持ちが向くと、そこだけが怪談から浮き立ってしまうことをお互い実感できたようだ。今回は、語り手、聞き手のコメントが、語り方に寄り、怪談そのものへの思いを十分に聞けなかった。学生達の、語り研修Ⅱの体験がとんだことでの意識の小間切れ感も否めず、サポートの不十分さを感じた。まとめの7つのポイントの説明の際、「語る上で大事なことは何か」考えてもらった。受講生に聞いてみると、「聞き手がいること」さらに聞くと「心をこめること」と答え、全員で「テクニックより思い～怪談と聞き手に心をこめて」という言葉を書き留めた。短期間に、覚えて語りきったこと、それだけで十分今後につながる意味のあることであったが、筆者としては、自分の語りを振り返り、周囲からのコメントを受けて、違う角度からも見つめなおした上で深めた語りをもう一度聞き合いたいという気持ちがより強く残る形となってしまった。

しかし、研修後の受講生の感想は、感慨深いものであった。

- ・語り手がリラックスして語りを行えるような環境や、楽しく語りについて学べる環境を作って下さり楽しく研修を受けることができました。
- ・実際に語る場所(例えば、清光院)に行ってみて、そこで語りの練習を試してみる。
- ・「聞く」ことは「語る」上でとても重要だと思う。また、お互いに「語り」

をして、感想を述べあうのは、何度やっても意味があることだと思う。

・丁寧にご指導いただけただけなのでモチベーションの向上にもなりましたので、研修を受けられてよかったです。

そして、実は研修終了後に、再度研修を臨む声が聞かれ、追加研修という形での実施が決まり、全員参加することになった。最後は、受講生全員の語りをもう一度聞き合い、「語り手、聞き手がともに楽しむためには」の視点から、受講生を中心にして話をしてもらった。

4) 追加語り研修 (3/11) (一般 3 名、学生 4 名、担当者 3 名)

研修の内容

- ① わらべうた「あんたがたどこさ」(肩たたきで)
- ② 発声練習「八雲の怪談奇談だ Y0！」
- ③ 語り(「化け狐」「人喰いの大亀」「消えぬ芸者の足跡」「人喰いの大亀」「子育て幽霊話」「化け狐」「耳なし芳一」とコメント)
- ④ トリニダード・トバゴの昔話「ヤギとライオン」を聞いてみよう
- ⑤ まとめ

語り手が、実践後のコメントで語った、怪談に対する思いが語りに表れていた。怪談の輪郭がくっきりしてきたと感じた。「聞き手の反応を見ながら楽しめた」と語ってくれた受講生もいた。聞き手も、1 回目の実践との感じ方の違いに触れ、語り方についての指摘も、よさを見つけながらも語り手の思いがもっと伝わるためにはこうしたらよいのではといった、一歩踏み込んだ内容が多かった。「語り部になったら、6 話全部を一人で語ることになるから」と 1 回目とは別の怪談を覚えて語った受講生もおり、他の受講生のよい刺激となった。意識的にも、語りの的にも厚みが出てきた。語るごとに楽しくなってくることを少し実感できたようである。終了後は、充実感と共に、「次はオーディションで！」と意欲的な様子の受講生たちの姿があった。

4. おわりに

今後、一緒に活動していく仲間になることを見据えて、八雲の怪談の魅力を伝えるものとして、お互いに育ち合えればと思う。心を開放して何度も何度も語り、聞き手の中にも怪談の中の新しい魅力に気づける語りを楽しんでほしい。オーディションを経て、語り部となった人達のために、フォローアップ研修も実施すると聞いている。さらに、解釈の違いによる語りの違いや八雲の怪談の中の「真理」、語りの環境についてなど語りを深める話ができればと考えている。語りは、練習が何より大事だが、実際の「松江ゴーストツアー」での 1 回 1 回の語りの経験が何より成長させてくれるものである。観光客や県民に分かるように説明できるためにも、松江観光協会の担当者から

は、今後「松江ゴーストツアー」のあり方も、新しく語り部となった人達の意見やアイデアを取り入れながら、一緒に考えていきたいと聞いている。新型コロナウイルス感染拡大で「松江ゴーストツアー」中止となった2020年だけでなく、松江の地を盛り上げていきたい思いはひとしおである。これまでを大事にしつつ、新しい風を吹かせて地域の文化資源はこれからも人の手によって繋いでいかれるだろう。2021年は、松江が国際文化観光都市になって70年の年である。松江の魅力、八雲ゆかりの地の怪談の魅力あふれる新たな「松江ゴーストツアー」を体験できる日を楽しみにしている。

最後に、資料提供やお話を聞かせていただくなど、お力を貸してくださった、小泉八雲記念館館長の小泉凡氏、一般社団法人松江観光協会の皆様に心より感謝申し上げます。

【参考・引用文献】

- ・小泉凡「小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）の文化資源的活用に関する考察」島根県立大学短期大学部松江キャンパス研究紀要第54号、2016年
- ・小泉凡「文化資源としてのひと」（井口貢編『観光学事始め「脱観光的」観光のススメ』法律文化社、2015年
- ・小泉凡「講演小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）—開かれた精神（オープン・マインド）の航跡を辿る—」ビブリア第152号、2019年
- ・小澤俊夫「昔ばなしとは何か」大和書房、1983年
- ・松岡享子「〈たのしいお話〉お話を語る」日本エディタースクール出版部、1994年
- ・ラフカディオ・ハーン「怪談 改版不思議なことの物語と研究」平井呈一訳岩波書店、2010年
- ・ラフカディオ・ハーン「新編日本の怪談」池田雅之編訳 角川ソフィア文庫、2005年
- ・小泉八雲「怪談・奇談」平川祐弘編 講談社学術文庫、1990年
- ・八雲会 小泉八雲記念館監修・編集「小泉八雲生誕170年／来日・来松130年記念出版 小泉八雲の怪談 BOOK」日本の面影「松江」実行委員会、2020年
- ・「松江ゴーストツアー新規語り部養成講座松江ゴーストツアー語り部用台本」一般社団法人松江観光協会有料ガイド受付窓口 MATSUENJOY（マツエンジョイ）、2021年